

招待席

八木 重吉

やぎ じゅうきち 詩人 1898.2.9 - 1927.10.26 東京
南多摩郡に生まれる。東京高等師範在学中にキーツの詩
に傾倒し、聖書をギリシヤ語で耽読し、無教会派の基督者
として詩壇とはあまり関わりなく境涯を深めつつ天
折。掲載作は、大正十四年(1925)同題の詩集より抄出。

秋の瞳 抄

序

私は、友が無くては、耐へられぬのです。しかし、私にはありません。この
貧しい詩を、これを、読んでくださる方の胸へ捧げます。そして、私を、あな
たの友にしてください。

息を 殺せ

息を ころせ
いきを ころせ
あかんぼが 空を みる
ああ 空を みる

心よ

ほのかにも いろづいてゆく ころろ
われながら あいらしいころろよ
ながれ ゆくものよ
さあ それならば ゆくがいい
「役立たぬもの」にあくがれて はてしなく

まぼろしを 追ふて かぎりなく
こころときめいて かけりゆけよ

赤ん坊が わらふ

赤んぼが わらふ
あかんぼが わらふ
わたしだつて わらふ
あかんぼが わらふ

心 よ

こころよ
では いつておいで

しかし
また もどつておいでね

やつぱり
ここがいいのだに

こころよ
では 行つておいで

玉

わたしは
玉に ならうかしら

わたしには
何にも 玉にすることはできまいゆえ

静かな 焰

各(ひと)つの 木に
各(ひと)つの 焔

木 は
しづかな ほのほ

秋

秋が くと いふのか
なにものとも しれぬけれど
すこしづつ そして わづかにいろづいてゆく、
わたしのところが
それよりも もつとひろいもののなかへ くづれてゆくのか

春

春は かるく たたずむ
さくらの みだれさく しづけさの あたりに
十四の少女の
ちさい おくれ毛の あたりに
秋よりは ひくい はなやかな そら
ああ けふにして 春のかなしさを あざやかにみる